

琉球新報 2016年4月3日



年子さん。

のね……。」と悲しむ
なせかクイズにする
りました。人前では

「フランクフルトのうたの人ですかー」とあちこちで声を掛けていただくことが増えましたが、きょうは、そんな私の運命の新曲をご紹介します。下さい。その曲のタイトルは「年子さん」。年はとりたくないよね。アレも年のせい・コレも年のせい……と、隠されたり様々な罪をきせられてしまっている「年」。もしも、そんな「年」が気持ちを語ったら何と言うだろう？ 何でも哲学してしまう職業病が、うたのタネとなりました。

私の名前は、年子です。というフレーズから始まり「いつの頃からか、あなたは私のことを隠すようにな

「哲楽家」 き々 紀

年子さん。

東風

最初は「きつと年子さんは、何でもかんでも年のせいにされて恨んでいるにちがいない！」と思い、できたのは演歌調。でも、どうもしつくりこなくて、次は「年を笑い飛ばしてしまおう！」とポップにしてみたものの、やっぱり違つ。そして最後にたどり着いたのが、ラブソングでした。

どんなに大好きな人でも、死ぬまで一緒だという確約はできません。年子さんだけは生まれた時から死ぬまでずっと一緒と約束してくれる、世界に一人の存在。けなげな年子さんの切なさと思うと、いまでも心がキュンとします。

いつもそばにいてくれて、ありがとね。みんなの中にいる「マイ年子さん」に、お詫びと御礼をする時間になればと思いつながらお届けしています。この曲が仕上がるまで1年もかかってしまったのは、私の年子さんが40歳になるタイミングを待っていたからだと、あとになつて気づきました。30代では、まだ歌う資格がなかったのだと(笑)。

自分の年子さんと闘わず、仲良くする。それが幸せの力。ギのような気がする40歳の私。あなたの年子さんは、お元氣ですか？

あした、転機になあれ！

1975年那覇市生まれ。98年早稲田大学第一文学部

哲学科東洋哲学専修卒業。企業のテーマ曲制作の依頼を機に、現在は哲楽と「うた」を取り入れた講演を行う。

2004年7月から12月まで「南風」執筆。